

イタリア空軍国防省発行” Rivista Aeronautica” 2020 年 3-4 月号記事
日本語 要旨

「ローマ-東京間飛行」のイタリア飛行士達の日本滞在
文 道原 聡

1920 年(大正 9 年)、「ローマ-東京間飛行」が成功したあかつきに、日本に到着したイタリア陸軍航空部隊の飛行士達の偉業を讃えるための公式歓迎祝賀式典は 42 日間に及んだという史実は広く知られている。

これは、最終目的地・東京の前日の大阪到着の 5 月 30 日から始まり、7 月 10 日の京都岡崎公園内の勸業館において開催された「空中平和博覧会」の開会式にまで及ぶ 42 日間をさしている。アルトゥーロ・フェラリンが操縦したズヴァ式 9 型複葉機は、この博覧会の一番の目玉として大勢の来場者の興味と関心を引き、フェラリンは開会式において、立って演説を行うという栄誉を得た。なおこの博覧会は 9 月 1 日まで開催された。

イタリア人飛行士達は日本滞在中に、まさに国賓級の特別の歓待を受け、国家・政府機関をはじめ、新聞や雑誌、一般国民は彼らを真の英雄として遇した。

6 月 1 日付の東京朝日新聞記事の東京帝国大学航空学研究班長の横田教授の『機も立派なら乗人(のりて)も立派』という言葉にも端的にあらわされているように、この快挙を成し遂げたイタリア製複葉機の性能はもとより、飛行士と機関工たちの勇気と忍耐と果敢と優れた飛行技術は、当時の日本人たちに高く評価された。

彼らはそれらの美德と技量をもって 106 日にわたる苦難に満ちた大冒険の後、最終目的地東京に到着することが出来たのだった。

飛行家達は日本滞在中、真の「スター」として、連日、歓迎会や祝賀会や式典に招待された。

当時の記録をもとに、イタリア飛行家たちの日本滞在中の詳細な日程を再現することが出来る。

1920 年 5 月 30 日、朝鮮半島の大邱から出発し、対馬海峡を横断し、大阪城の東側にあった城東練兵場に到着。

翌 5 月 31 日、大阪を出発し、約 400km の飛行の後、20 万人が待つ東京代々木練兵場(現在の代々木公園)に到着した。

代々木練兵場に集まった大観衆は、イタリア人飛行士達の到着が、当時の日本人にとって、いかに重要な出来事であったかを良く示している。

到着地での盛大な歓迎式典が終わると、搭乗員たちは、その後の東京滞在中の宿泊場所として定められていた築地精養軒に移動し、長旅の疲れを癒した。

1920年6月2日は、一日の休養日を過ごしたあと、彼らはまずイタリア大使館を公式訪問して到着の報告をしたのち、帝国飛行協会総裁の久邇宮邸と首相(当時 原敬)官邸を訪問したのを皮切りに、日本での過密なスケジュールをこなしていった。

4人のイタリア飛行士達は、国立公文書館の外国人叙勲録によると6月1日付で叙勲(フェラリンとマジエーロは勲五等、マレットは勲七等、カップンニーニは勲八等)。

6月3日、2人の飛行士は、宮中桐の間において大正天皇の妃 貞明皇后に謁見を許され、叙勲の御礼を啓上した。謁見中の会話の内容に関しては、公式記録に残っていないが、アルトゥーロ・フェラリンの自伝「世界への飛行」によると、皇后から、東京の小学生に飛行をテーマに作らせた作品をもとに2冊の記念帖を編纂することと、6月24日に執り行われることになるマリオ・ゴルデスコ大尉とジュゼッペ・グラッサ中尉の葬儀について告げられたという。

同日午後には、小石川後樂園において行われた招宴において、2人の飛行士は田中義一陸軍大臣より日本刀一振りずつを贈呈された。

官公庁だけではなく、民間主催の歓迎行事も数多く行われた。

6月4日には、日本の重要な財閥三井家の日本橋三越を見学。記念撮影と記念品の贈呈、お茶会が開催された。

6月6日には、全国青年学生会主催で、日比谷野外音楽堂において、音楽会と武術の実演が行われ、小学生から大学生まで6万人の観衆が集まった。音楽会の際に、楽曲「ワシントン独立」をもとにした「天は晴れたり」が、マジエーロとフェラリンに捧げられた替え歌にして合唱されたが、これは現在に至るまで慶應義塾大学野球部のための応援歌として歌い継がれている。

当然ながら、イタリアの飛行家たちは、日本の飛行家団体からも招待を受けた。

6月8日には帝国飛行協会開催で芝公園の紅葉館で祝宴が開催された。これは現在の東京タワーの近くである。

12日には所沢陸軍飛行学校を訪問した。所沢は日本航空発祥の地と言われ、現在、所沢航空発祥記念博物館には、「ローマ-東京間飛行」を成し遂げた2人の飛行士に捧げられた展示コーナーが設けられている。

6月15日には、田尻東京市長がイタリア飛行士達を帝国劇場に招待し、歌舞伎の観劇と晚餐会が行われた。

東京帝国大学山川総長が主催した晩餐会も行われた。

彼らの日本滞在中の行事のなかでも、とりわけ感動的だったのは、九段偕行社(現在のイタリア文化会館の近く)で執り行われた曹洞宗による、ゴルデスコ大尉とグラッサ中尉の葬儀であった。特にゴルデスコ大尉は「ローマ-東京間飛行」に本隊隊長として国王から天皇への親書を託され、ズヴァ式複葉機 9 型で参加していたが、彼らは 4 月 13 日に現在のイランのブシールの飛行場において着陸時に失敗して墜落死した。ちなみにゴルデスコ大尉は、イタリアのフルバラ飛行学校の校長時代に 100 名にも及ぶ日本人飛行士や機関工に対し、『非常の好意を持って熱心其の任にあたり破格なる諸種の便宜を与え』指導に当たっていたという功績が認められて、殉死後の 4 月 28 日付で勲五等を叙勲されている。

6 月 25 日には、イタリア人飛行家たちにより、彼らの複葉機による東京上空での御礼デモンストレーション飛行が行われた。

このような歓迎祝賀式典の、皇室を頂点とする国家機関の彼らに対するもてなしや、多くの日本国民の熱狂的な歓迎ぶりは、彼らが日本でいかに尊敬と賞賛を持って迎えられたかということを証明している。

その一例として、当時の日本国民のイタリア人飛行士達の偉業にたいする感情を非常によく表していると思われる、東京の小学生の絵と書を集めて編纂された 2 冊の記念帖に東京市小学校教員会の松下専吉幹事長が 1920 年 6 月 13 日付で記した挨拶文を以下に引用する (原文のまま)。

この 2 冊の記念帖は、フェラリンの自伝によると、貞明皇后からイタリアのマルゲリータ・ディ・サボイア王妃に贈呈するために、フェラリンに託されたものである。

閣下並びに諸君

本日茲(ここ)に我が日本に於ける唯一の初等教育者の団体たる東京市小学校教員会員四千人を代表して今回世界空前の一大壮挙たる羅馬東京間一萬有余哩の

長空飛行に成功し堅忍不撓(けんになふとう)の勇氣と凌雲駕風の精技とを以て

遂に此の赫々(かくかく)たる名誉を収められたる伊太利航空団の傑士マシエロ

フェラリン両中尉に対し満腔(まんこう)の敬意を表し歓迎の赤誠を披歴するの機会を得たるは余の最も光榮として欣快(きんかい)措く能はざる所なり。

顧(おも)ふに欧州に於ける伊太利は極東に於ける我々日本と共に最も古き歴史を

有し且其の風土人情互に相酷似せるのみならず此の東西の二国は又歴史的に最も親密なる関係を有せり即ち第十三世紀の終に於て我が日本の名を初めて欧州人に紹介せしマルコ・ポロは伊太利の人にして第十六世紀の末に於て我が日本人が初めて其の足跡を欧州大陸に印せしも亦伊太利の地たりしなり。

此の如き旧誼（きゅうぎ）を有する伊太利国民に対する我が国民の特殊なる親愛の

感情は閣下並に諸君の夙（つと）に諒知せらるる所にして『今や両国間に空中聯（れん）絡の挙成る以上余は更に政治上並に精神上の連繫を通して欧亜の兩大国民間に理

想の照応と目的の合致とを確立し得（へ）しと信ず』と述べられたるニッチ首相*の提言は我が国民の齊（ひと）しく共鳴を禁ずる能わざる所なるを確信す。

空翔の使節が齎（もた）らせる日本への意味深き使命は我が国民に實に重大なる

感動を与えたと同時に百余日の長期間疾風蛮雨（しっふうばんう）と戦いてあらゆる惨

苦を嘗（な）め 而（しか）も遂に最後の目的を達成せし両中尉の不屈不撓（と）う）の精

神と勇氣と努力とは活きたる教訓として我が帝都二十萬の小学児童の精神に最も偉大なる感化を及ぼしたるは余の無上の歡喜と共に感謝に堪えざる所なり。

余は茲（ここ）に謹みて両中尉の健康を祝し併せて伊日両国間の交際の益に親善を加ふるを慶賀し 重ねて閣下並びに諸君に対して深厚なる敬意を表す。

大正九年（西曆一九二〇年）六月十三日

東京市小学校教員会

幹事長 松下專吉

*註： フランチェスコ・サヴェーリオ・ニッティ首相

il Primo ministro Francesco Saverio Nitti

©All right reserved

写真キャプション

記念帖に収められた東京の小学生の絵 イタリア人飛行家達を歓迎するために東京代々木練兵場で待機していたドラゴンの山車飾りをつけたFIAT自動車とフェラリンとマジエーロの肖像が描かれている。

フェラリンとマジエーロ達を迎えるために 20 万人の群衆が待機していた。

大阪到着の模様

交通機関雑誌「乗りもの」表紙 1920 年 6 月号

当時の新聞雑誌には多くの特集記事が掲載された
大阪と東京到着の様子を報道した東京朝日新聞（1920 年 5 月 31 日付、6 月 1 日付）